

奈良言友会会報

まほろば



野迫川村 立里荒神

第19号

平成28年10月発行

第5回ことばの親子交流会

堀 茂

「ことばの親子交流会」は奈良言友会が発足した2012年に第1回が行われて以来、今年、第5回を迎えました。奈良県下の小学校の通級指導教室（ことばの教室）の先生方をはじめ、多くの方がたのご協力をいただき、今年も開催することができました。そして、この行事が吃音のある子どもたちを地域で支援する催しとして根付いてきたことを感じます。

今年8月6日、昨年と同様、生駒山麓公園で開催されました。

参加したのは、奈良県下の吃音のある子どもときょうだい20人、保護者17人。ボランティアスタッフは、ことばの教室などの先生、保健婦、言語聴覚士養成校の学生（5名が参加）、それと、奈良言友会の当事者10名と大阪、京都、名古屋の言友会のメンバーがかけつけ、計26名、全部で64名と昨年を20名も越える大勢が集いました。毎回参加する子ども、今年新たに参加した子どもといろいろですが、第1回から毎回参加して今は中学生の二人は、子どもグループのリーダー的な存在です。

午前10時の開始、アイスブレイクの自己紹介ゲームで、緊張をほぐしたあと、子どもたちはスタッフとチームを組んで、林間に設置されたフィールド・アスレチックに挑戦。子供たちは、暑い中、水分を十分に補給しながら、ボランティアのお姉さん、お兄さんたちと共に元気にあそび交流しました。

おとなは屋内で研修。今回は、長年、京都でことばの教室の担当をされ、現在は京都言語障害研究会の会長をされている脇豊明先生による講演と質問アンケートによる質問の時間を設けました。講演と質問の間に、峠谷さんによるヨガの実習で頭と体をほぐし好評でした。

子どもたちが外から戻って、お風呂で汗を流してから、全員がバーベキューサイトに移動。こどもグループと大人グループに分かれて炉を囲み、和気藹々の楽しい集いになりました。暑い中にも、周囲の木立から時折涼しい風も通り、保護者の方々にとっては親睦を深める機会にもなり、子どもたち同士友達もできました。自己紹介では子どもたちも元気に発言していました。

実施したアンケートでは、「楽しかった」「親子で参加できてよかった」との声が多く、また、このような会があるだけでも心強いとの声もありました。また、当日は大変に暑かったので、野外でのアスレチックはつかれたとの意見もありました。

今回、子ども達は吃音のあるともたちや青年たちと野外で交流する機会に、また保護者にとっては、研修でお互いの思いや悩みを共有し、吃音当事者との交流を通して、子どもの将来を見通す手ごかりを得る機会になったのではないかと思います。



生駒の親子交流会のことは、去年から知っていたのですが、忙しかったのと、子どもとかかわることに自信が持てず、応募はしませんでした。その後、大学卒業後の進路を考えたときに、小学校教員になることが大きな選択肢としてあがってきました。それは、学校が楽しかったからというよりはむしろ、ぼくが受けたような教育をもう次の世代の人たちに受けてほしくないという気持ちからでした。かつてご自身も吃音者だったライター、近藤雄生さんの「吃音と生きる5」（新潮45, 7月号）に取り上げていただき、そこに詳しいのですが、ぼくが通った私立中高一貫の男子校は、いい大学に行くことだけが目標とされ、人間性を封殺した教育がされていました。そういう教育から子どもたちを守らなくてはならない、社会という海がエリート主義という嵐に吹き荒れていても、教師としてのぼくが防波堤になって、クラスという港にいる子どもたちだけは、のびのびと穏やかに過ごせるようにしたい。いささか傲慢にも思えますが、そういう気持ちが出てきました。影響を受けたのが、生前言友会でもレッスンをしていた竹内敏晴の著作でした。その代表作『ことばが劈かれるとき』には、今述べた私の気持ちが、さらに強い信念で語られています。「私は道傍で遊んでいる子どもを見た。ふいに涙が流れた。おれはもうダメだ。新しく生きられない。しかし、もう二度とこの子どもたちに、おれと同じ教育はさせない。おれの歪みをてこにして、おれと同じように人間性を圧殺する教育を子どもたちに向けようとするものを嗅ぎわけ、そして闘い殺してやる。」（ちくま文庫版 p63）。竹内はすでに亡くなりましたが、その弟子の瀬戸嶋亮という人のところで、竹内を引き継ぐレッスンを受けています。レッスンを受けたり竹内や瀬戸嶋さんの文章を読んだりして思うのが、人はありのまま素晴らしいということです。みな、それぞれにとってもよい個性を持っています。学校はルールを押しつけようとすると思いますが、それは最小限にして、子どもたちがおもしろいと思うことを一番大切にするのがよいと思います。そして、竹内は教育について熱心に発言しましたが、竹内の思想を、学校教員の現場で実践したいと思うようになりました。そういう思いと、これは竹内もそうだったのですが、子どもという自由な存在とのかかわりの中で、ぼく自身が回復していくことも期待して、今年の5月から、京都市の小学校でボランティアをはじめました。

ぼくはずっと、子どもたちとのかかわりを怖れていました。「彼らは率直に、ぼくの吃音を指摘するだろう、それはとても恥ずかしいことだ」と。しかし、やっと最近になって、吃音のことを聞かれてもいいやと思うようになりました。ボランティアの現場でも、実際に何度か「なんでそういうしゃべり方なん？」などと聞かれましたが、簡単に説明すると、子どもたちはずっと理解してくれました。そういう経緯があり、今年こそは生駒の吃音の子どもの交流会に参加しようと思いました。奈良言友会は何人も知り合いがいて、とても雰囲気の良いところだと知っていたので安心して、以前から親しくさせていたでいる会長の堀さんにご連絡したところ、ご快諾していただきました。奈良に住んでいて、京都女子大で子どものことを勉強している河南早紀さんも誘いました。ぼくは河南さんと同じ班で、子どもたちと一緒にアスレチックをしました。興味深かったのが、その後お風呂に入ったとき、小学1年の子に「中学何年なん？」と聞かれたことです。「ぼくもう大学生やで」と言うと、「そういうのよくわからへんねん」と照れていました。ぼくも小1のときは全然わからず、中学生はとても大人のイメージだったことを思い出しました。その子とはポケモンの話をよくしました。僕が最後にしたポケモンのゲーム「ダイヤモンド&パール」が、彼が最初にしたポケモンのゲームらしいです。最近のポケモンのことはよくわかりません。他にも、子どもたちと意味もなくかけっこ競争をしたり、鬼ごっこをしたりして遊びました。子どもたちも、吃音の当事者かその兄弟姉妹なので、どまることも気にしないで話すことができました。BBQも、スタッフの懇談会も、とても楽しかったです。

京都でも、生駒のこの集まりより規模が小さいですが、「吃音・親子のつどい」というものを11月3日の文化の日に企画しています。10時半～12時半くらいまで、京都鴨沢そばの下京青少年活動センターです。京都市のことばときこえの教室の先生方や、言語聴覚士の先生が中心になっています。小中高生とその保護者で参加してくださる方を募集しています。奈良の方はすこし遠いかもしれませんが、よければご参加ください。詳しくは、yagi.tomohiro.14@gmail.com（ぼくのメールアドレス）までご連絡ください。

最後になりましたが、生駒のつどいにかかわってくださった皆様にあらためて御礼を申し上げます。おだやかな性格でみなをまとめてくださる堀会長、その明るさでみなに笑顔を与えてくれる青木さん、たたずまいの美しいヨガの先生峠谷さん、研究者として言友会にかかわってくれている錦戸さん、精力的にイベントを開いてくれる後藤さんと、小学3年にもかかわらず大人にまじって活動の手伝いをしてくれた息子さん、また、京都でもお世話になっている方々ですが、学校と吃音当事者をつなげてくださるダンディーな脇先生、名古屋から来てくれる戦友の宮脇さん、大学で勉強しているだけあって子どもたちをととても上手にまとめてくれた河南さん等々、多くの方々にお世話になりました。来年もぜひ参加したいと思います。

私のきつおん歴

澤辺 佑一

今思えば、僕が吃音と思ったのが小学5・6年の時で、友達に「なんでそんなしゃべり方なん。」って言われたのがきっかけで、それまで知らなかったし意識になかった。でもそういう事を言われて初めて、僕は他の人は少し違うのかなと思いました。

中学生になると、ちょっと僕の気にしてる事をからかう悪い子が出てきて、「お前は今日から山下清や。」と変なあだ名をつけられる。でもそういう子は一部の人間で僕はあまり気にせず過ごしました。

たぶん僕が吃音と思い始めた頃から、しゃべるのが（特に人前で）すごく苦手になったと思います。周りにも吃音の子はいなかったし、いたら変わっていたのかなと思う。ひょっとしたら居たけど、気が付かなかったのかも。周りに気づかれないよう頭の文字を小さく言ったり、2番目の文字を言ったり又体に刺激を与えてみたりと、周りにばれると又からかわれるという心理が働き、ばれないようにするのが大変だった。でも理解してくれている友達もいたので助けてくれた時もあった。

高校そして大学に入ると、もう何も言われなくなった。多分人のそう言う事を言っただけではいけないと分かったんでしょうか。でも文化祭・何らかのイベントや、部活の副キャプテン（弓道）で人前でしゃべらないといけない機会が極端に増えた。今までは避けてきた。でもこれからは避けて通れないと思った。マイクを使うときは、ボリュームを小さくして大声でしゃべると吃音になりやすかったので、それでしゃべった。マイクを使わない・大声も出さない時は、周りに気づかれないように体に刺激を与えしゃべった。そんな努力をしているので、多分僕が吃音者であることは知らずに卒業した人もいるのかも。

社会人になると電話対応の練習（新人は理系・文系全員らしい）をさせられた。受けるだけで掛ける事はないにしろ上司に「落ち着いて喋り」や「ゆっくり喋り」と吃音を知らない人が言うきつい一言を両親以外で初めて言われた。「僕は言葉が詰まるんです。」（この時はまだ吃音と言う言葉を知らない）と言っても「そんなことない。」と言われ、説得するのが大変だった。結局あまりしゃべる事のない部署（製造）に回してもらった。元々製造も好きなので、仕事も苦ではない。それからはあまり吃音で困ったことはない。

僕が吃音と言う言葉を知ったのは最近で、親がホームページで見つけて来たのがきっかけで、この時に言友会の事も知った。参加してみて僕と同じ吃音の人の話を聞いてみんな同じ悩みを抱えてるんだなぁと共感するところもあった。もちろん人それぞれ性格も違うので共感しない部分もあるけどいろいろな話を聞いて良かったと思いました。これからも吃音とは一生付き合っていかなければならないが、気楽な気持ちで頑張っていきたいと思っています。

例会報告

6月4日(日) 10:00~12:00 「演劇に挑戦」 参加5名 担当・報告 山崎 貴浩

「演劇に挑戦」の例会はこれが3度目だが、参加者がいつも少ないのはそれなりのプレッシャーになっているのだろうか？ 会話には「間」というものがあり、これを外すと面白さや気持ちが悪くなり、かわりに面白さや詰まるかゆえに発言に重みが増すということもままあることなんである。

<参加者の感想>

○セリフについて。「ありがとう」とか、日常つかう言葉にも、言い方や感情によって、いろんな表現があるんだなと思いました。言葉を大きな声で、感情を表現しながら言うのはとてもむずかしい。自分では『照れ』は入れてないつもりでも、入ってしまうことが分かった。 S・Y

○声を出すということが楽しくなりました。「愛してるよ」と言うとか何か心がウツリしました。個人によってつまる言葉がちがうことを知りました。劇をすることは別の自分になれて楽しいです。 T・H

○演技とは、別の自分になること。それによって言葉を自由に楽しくつかうことができると思った。 H・S

○演劇を通して日々のコミュニケーションを見直すきっかけになりに良かったです。楽しかったです。 I・H

○やっぱり、大きな声でセリフを言うのは、気持ちいい♪ Y・T

7月2日(土) 13:30~16:30 参加8名どーもわーく、名古屋言友会の宮脇愛実さんが参加

第1部 前向きに生きる ~アドラー心理学を吃音に活かす~ 担当・報告 堀 茂

若い頃からアドラー心理学に関心をもっていて、本なども読みましたが、自分の吃音を考えるうえで得るところがありました。近頃は、アドラー心理学がブームになっていて、本もよく売れているようです。アドラーの本は、私にはかなりむずかしいと思っていたのですが、最近、NHKのEテレ「100分で名著」で岸見一郎氏の解説による「アドラー心理学」が放送されましたが、大変分かり易く、よく理解できたように思います。例会では、放送されたことを元にアドラーの考え方を述べ、どこがどのように私の吃音に役にたったかをお話しました。



以下、例会で言い残したことも含めて、簡単にまとめてみました。太字は放送で述べられた内容、「吃音でいえば」以下は私の考えをのべたものです。

○アドラーは、人生を過去の原因からではなく、今の目的から考える。

吃音でいえば、みんなの前で話すことに失敗した人は、また失敗するのではないかと不安になり、それがまた次の失敗につながりやすいということがあります。

だから過去のことを振り返るよりも、むしろ吃音を認めた上で、これから自分が未来に向けて目的とすることを実現するために行動をおこすことです。その際、流暢性を高める話し方を行うのも目的を達成するために役立つでしょう。

○アドラーは、人間を行動へと突き動かす原動力を「劣等感」と考えた。そして、他(ひと)と比べて劣っていると感じることからくる不安や葛藤(劣等コンプレックス)が前向きに目的を目指す人生を妨げると考えた。岸見氏は、劣等コンプレックスに支配されないために、自分が短所だと思ふことを長所に置きかえることを提案する。例えば「臆病」を「慎重」に置きかえるように。

吃音でいえば、吃音を知られたくない、話す場面を避けたいと悩むのは、劣等コンプレックスが元にあると思います。それを克服するために、ひとつには吃音にはデメリットだけでなく、メリットもあることを知っていくことだと思います。例えば、私のこと而言えば、言おうとすることが自分の中でよく整理されていなかったり、相手の都合を余り考えずに、何かお願いしようとした時などに、どもり易いことに気づきま

す。「どもること」によって、もっと整理してから言いなさいとか、もっと相手の都合を考えてお願いしなさい、などを教えてくれるように思います。

○アドラーは、人間のすべての悩みは対人関係の悩みであると考えた。そして対人関係をよくするために「共同体感覚（他者を仲間とみなし、そこに自分の居場所があると感じられること）」が大事であるとした。自分が他者より劣っていると考えると共同体（仲間）の中に入って行けない。共同体感覚を持つためには、自分をありのままに受容し、他（ひと）を仲間と感じ、他（ひと）のために役に立とうとすることが必要であると考えた。

吃音でいえば、吃音を劣ったものと考えて気にすると、自分を守ろうとガードを固めたり、他（ひと）と接することを避けたりします。そうすると、なかなか仲間の中に入っていきません。そうではなくて、吃音のある自分があるがままに受け入れることによって、自分のことで精いっぱいであった人が、他（ひと）の役に立とうと思うようになります。そして他（ひと）のために役立っているという実感をもつことができれば、自分自身に対する評価を高めることができます。

以上、例会で話したことを簡単にまとめてみました。自分の考えとは違うと思った方もおられるかと思います。参考になることがありましたら、それを元にそれぞれ考えてもらったらと思います。

<参加者の感想>

○アドラー心理学の知識が全くなく、かんがえさせられる所が多々あり、有意義でした。N・Y

○心理学の勉強ができてよかったです。アドラーの「嫌われる勇氣」も必要とは私も感じていたことです。T・H

○アドラー心理学の考え方もけっこうなるほどということもあった。けどちょっとむずかしくもあった。S・Y

○アドラーのことが聞けてよかったです。I・H

○アドラー心理学が、すごく自分のためになりましたので、よかったです。M・S

○アドラー心理学、今後に活用したいです。M・M

第2部 ヨガで心とからだをリフレッシュ！

担当・報告 峠谷 治美

ヨガとの出会い

「痛い!」・・・保育中に転びそうになった子を助けようと思い手を伸ばした瞬間に肩に激痛が走りました。その激痛の原因は四十肩でした。命を預かる仕事をしているにも関わらず、人命をも守れない自分に憤りを感じると共にこれ程の痛みになるまで自分の体の状態に気がなかったことを深く反省しました。

これがヨガを習うきっかけです。そして現在ヨガ歴12年となりました。ヨガを習った事で、体のどこかが痛くなくても放っておくのではなく、冷やしたのではないか、使いすぎではないかなど原因をさぐるようになり、痛みになる前に予防するという考えに変わりました。

現在は取り替える事の出来ない体を大切にすることを感じて欲しいとの思いを込めて、ヨガ教室を子どもから大人まで開催しています。皆さんに気持ち良かったよ、またやりたいと言って頂きとても嬉しく思っています。

ヨガで私が一番好きなポーズそれは笑顔です

さあやってみてください! 体が温かくなってきてでしょ!

<参加者の感想>

○肩こりや腰痛があるので、ヨガをしたことで、体がだいぶ楽になりました。N・A

○初体験のヨガに戸惑いながらも、よい汗をかきました。N・Y

○リラックスできました。横になってしているうちに眠ってしまいました。H・S

○体が軽いので、ついいけるか不安だったけど、思ったよりは良い感じでした。できるが家でやってみようと思います。S・Y

○とてもリラックスできてよかったです。I・H

○ヨガは人生ではじめてだったので、すごくためになりました。M・S

○とても気持ちよく、リラックスできました。M・M

○ヨガが良かったですと言ってもらえて嬉しいです。T・H(担当)

9月3日(土) 13:30~16:30

参加者：8名。うち初参加の方2名

第1部 各地言友会の会報を読む

担当・報告 青木 明大

今回は、各地の会報を音読する例会を行いました。この例会の目的は、

- 1.ご送付頂いている各地言友会の会報の有効活用
2. 全員がことばを発すること

の2点がありました。1は、国内最大の当事者組織である言友会ならではの、全国に仲間がいることを感じてほしいとの思いがありました。2については、言友会の参加者には、積極的に発言をする人、自分から意見を主張することが苦手である人もいます。せっかく参加していただいたのであれば、(声を出せずフラストレーションを溜めることなく) 声を発してほしいとの思いがありました。

例会当日は、各地の会報を堀さんに持参していただき、参加者の皆さんに回覧し、気に入った投稿文を音読していただき、その後になぜその投稿文を選んだのか、話してもらいました。参加者の方の中には、初参加の方が2名おられ、全国に吃音の仲間がいること、またそれぞれの地域にて活発に活動をしていることを感じてもらったのではないかと考えております。また、音読をし、選んだ理由を言うことで、その方の人となりも少しは分かり、また、初めて参加してくださった方も、ご意見を言うことができたと思います。お話しいただいた感想の中で印象に残っているのは、短い投稿分を選んだのに、ひどくもってしまい時間がかかってしまったというものでした。なかなか、吃音は一筋縄にいかない、改めて認識させられた感想でした。

これからも、日本中に仲間がいること、一人ひとりが発言ができる例会を企画していきたいと思います。

参加してくださった皆さん、ありがとうございました。

<参加者の感想>

○皆さん読むのが大変上手でびっくりしました。読み方のコツをおさえているというか、大変参考になりました。M・K

○同じ経験をした方々の話が聞けてよかった。U・F

○初めての皆さんとの出会いで緊張しましたがとても楽しく過ごせました。少しでも思いが共有できたようで嬉しかったです。T・T

○初めて参加してくださった方がいらして、楽しかったです。A・A

○朗読するのは言葉がつかまるからいやだったけど、うまく読めなかったです。S・Y

○久しぶりの朗読で緊張しました。M・G

吃音人物誌その3 「徳川家光」と「徳川家重」

山崎 貴浩

「余は父や祖父とは違う。生まれながらにして将軍だ！」徳川幕府の権力が確立したことを示す象徴的な発言として三代将軍・家光が戦国時代からの梟雄・伊達政宗に言った言葉だと伝わっている。徳川260年、世界史上でも稀なほど平和が長く続き、文化が発達した江戸時代。その政治体制を確立した将軍として徳川家光には名君のイメージがある。しかし、これが実はそうでもなかったというのが少し掘り下げた歴史の見方である。それどころか相当な馬鹿殿様だったのを周りが寄ってたかって名君に見せるよう、あの手この手で隠していたという説もある。家光といえばワンセットで思い浮かぶのが乳母の

「春日の局」であろう。謀反人・明智光秀の重臣の娘という出自にも負けず家光の乳母になって陰で家光を操る人物として恐れられた。もう30年ほど前であろうか、春日局が大原麗子の主演でNHK大河ドラマになったことがあった。女性に興味を示さず男色にばかり励む若年の家光に、大原麗子の春日局が次から次に美しい側室を勧め、「早くお世継ぎを！ お世継ぎを〜！」と叫ぶセリフが当時ギャク的に流行ったものだった。ちなみにその時の家光役はまだ売れる前の江口洋介だった。家光が吃音であったと明確に記した歴史書はないようだが、幼少から病弱で神経が細かったのは確かなようで、江戸時代の武士の生活に詳しい歴史学者の山本博文氏なども不安神経症だったと判断している。小説家も何人かは家光の幼少時代を吃音にして描いている。私のはっきりと記憶しているのは柳生宗矩を主人公にした山岡荘八の「春の坂道」である。柳生新陰流の剣法でもって幼少の家光を鍛えた大目付・柳生但馬守が狂言の言い回しを練習することで家光の吃音を矯正するシーンが描かれている。

ここで取り上げるもう一人は、暴れん坊将軍吉宗の息子、9代将軍・家重である。家重は、父・吉宗がまだ紀州藩の部屋住みだった頃に長男として生まれたが、幼少の頃に病気に罹り、それから言語不明瞭になったといわれている。吉宗は次男、三男が俊秀だったのでよほど家重を廃嫡しようかと悩んだようである。しかしお家騒動にもつながりかねず、また早く母親を亡くしていることもあって不憫にも思ったのであろうか、それとも家重の長男（後の家治）が俊秀だったからか、家重は9代将軍の宣下を受ける。その家重が重用した家臣がかの有名な田沼意次である。田沼意次は賄賂政治の悪玉として描かれることも多いが、経済にも明るく重商主義を取るなどスケールの大きな政治家ではあった。また、家重の寵臣に大岡忠光という人物がいる。言語不明瞭な家重の言葉を聞き分けられたのはこの大岡忠光だけだった。そうであれば忠光はその気になれば相当な権力を持つことができたはずだが、自制心の強い人で決して驕った振る舞いはなかったといわれている。かの名奉行・大岡越前守忠相の縁戚にあたる。

□2016年度の年会費納入およびご寄附ありがとうございました。（9月現在。敬称略）

三島学、西村泰弘、田平隆彦、稲植英和、峠谷治美、山崎貴浩、堀茂、市田浩志、天羽郁子、錦戸信和、後藤文造、青木明大、松本勝利 <寄附> 稲植英和 5,000円

奈良言友会の例会

日時：偶数月は第1日曜日 10:00～12:00 奇数月は第1土曜日 13:30～16:30

場所：奈良市はぐくみセンター（JR奈良駅西口 南へ歩3分）

奈良言友会連絡先	堀 茂（ほい しげる。わいと年配です。） 〒636-0915 生駒郡平群町春日丘2-13-15 TEL/Fax0745-45-2857 090-9610-6393 sigeru1030@yahoo.co.jp
	青木 明大（あおき あきひろ。わいと若いです。） akihiro.aoki.16@facebook.com URL: https://www.facebook.com/akihiro.aoki.16

奈良言友会HP <http://nara-genyukai.jimdo.com/>
奈良言友会会報誌「まほろば」編集発行 山崎貴浩